

平成29年度文京区障害者地域自立支援協議会 相談支援専門部会検討内容

<実施状況>

- (1) 第2回(平成29年10月10日)…平成29年度第1回定例会議の報告及び意見交換、地域コミュニティの活動拠点について～支えあえるまちづくり～

<内容総括>

1. 平成29年度第1回定例会議の報告及び意見交換

- テーマ:事業所のストレングスを考える 目的:事業所で抱えている課題を共有し、より良い連携を目指す。今回挙げられた課題を昨年度文京区が行った実態調査の内容と即して捉えてみると、実態調査でも同じようなことが課題として見えてきた。①～⑧の課題点を再度実態調査とリンクさせながら振り返る。
- ①相談支援体制の脆弱性 計画相談自体をよくわかっていないと思われる人が全体の5割程度いることが伺える。地域ニーズがあるにも関わらず、事業者が増えていく見込みが少ない。
- ②家族、世帯全体への支援の必要性 主な介助者・支援者は配偶者や母親などの家族。困った時の相談相手は約7割以上が家族、親族。
- ③日中活動支援に繋がらない方への生活支援
- ④行き場所、居場所の確保と継続した支援
日中は「特に何もしていない」、「自宅で家事をしている」という方が約4割を超える。高齢障害者が増えている。→就労支援だけでなく、高齢や障害が重い方でも日中過ごせる、集える場所の確保が必要。
- ⑤医療との連携強化 障害や心身の不調に気付いた時の相談先は約6割が医療機関。→医療関係者と福祉関係者が早めに情報共有しながら、連携を取り、支援に当たることが大切。
- ⑥医療ケアが必要な障害者・児のサポート 日常生活で医療的ケア(喀痰吸引、栄養管理、導尿、呼吸管理)が必要な方(3.7%)→数は少ないが、サービスが受けられないとなると圧倒的に家族の負担が大きい。
- ⑦地域住民を含めた地域福祉力を高めるような活動
- ⑧人材育成の課題とマンパワー不足 事業所経営で重視していること→職員の資質向上が約7割。

【委員の意見】

- ・ 定例会議で出てくる内容は実態調査でも明らかに数値として出ている。また、来年度以降の障害者福祉計画にどのように反映されているか、注視していく必要がある。
- ・ 現場で家族から寄せられる相談は、困り果てた末での相談であることが多い。もっと早い段階から相談できる、相談しても良いのだと思ってもらえるような地域になると良い。
- ・ 相談そのものがもっと気軽に行えるようになることは、障害を早期発見・早期治療する為にも必要である。
- ・ 困った時の相談相手、話し相手が身近にいないというのが一番問題である。

【まとめ】

- ・ 親会からどのように施策に盛り込まれていくのか、また、どのように反映されていくのか、文京区での施策の動きと共に今後確認していきたい。
- ・ 相談支援の脆弱性に関しては、区や事業所だけの取り組みだけではなかなか解決できない制度上の問題も根深い。即効性のある解決は現段階では難しいが、区としても要望は国に挙げているので、区と事業所ともに今できることを一つ一つ積み上げていきたい。

2. 地域コミュニティの活動拠点について～支えあえるまちづくり～

地域の居場所『こまじいのうち』 実践報告

文京区社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター 浦田 愛氏より

【委員の意見】

- ・ 専門職だけではなく、地域住民を巻き込んだ政策が今後必要。 地域の人を巻き込まないと本当の地域課題は見えてこないのでは。
- ・ 文京区のインフォーマルな資源がまとめられた冊子のようなものがあると良い。

【まとめ】

- ・ 専門職だけの支援に行き詰りを感じており、提供できる支援の枠組みに限界がきている。
- ・ 今後は地域住民にも仲間に入ってもらい、協力してもらうことは必要不可欠であると再確認できた。

○第 2 回定例会議（平成 29 年 9 月 27 日）…テーマ『多様化している社会資源を知る』

<内容>

・2つの事例を元にグループワークをし、本人のニーズに合わせた社会資源の活用を考える。

【青年期の事例】主訴：本人「相談できる場所がほしい」家族「本人の将来への不安」。発達障害があり、不登校、引きこもり状態で昼夜逆転の生活を送っている。調子を崩すと生活自体も崩れてしまう。何とかしたい思いはあるが実行に移せないでいる。

【中年後期の事例】主訴：「借金があり、今後の生活をどうしていいかわからない。」うつ病で希死念慮もあり、自暴自棄状態。生活全体をサポートしていた伴侶が他界し、自分一人では何もできないと言う。親族や近所との付き合いもない。ゴミ屋敷状態で片付けたい気持ちはあるがなかなか行うことが出来ない。サービスの拒否もある。

<グループワークまとめ>

【青年期の事例】

・支援者や身近な人が自宅訪問などのアウトリーチ支援を行い、現状に至った理由や今後の希望を聴き、社会資源やかかわる人等につなげていく。

・インフォーマルな場も含め、仲間作りができる場や安心できる居場所につなげる。

・教育・福祉・医療等、関係機関で連携しながら支援していく。

・家族支援も重要。

【中年後期の事例】

・アウトリーチ支援を行い、本人が大切にしているものや事柄を通して信頼関係を作り相談にのる。

・近隣住民を含めた支援者と、法律・医療・福祉等の関係機関で連携しながら支援していく。

・ゴミ屋敷の問題は、ヘルパーや、NPOの支援団体などに依頼できないか。

⇒両事例共に、社会とのつながりが無い方である。地域にはこのような方々がまだまだたくさんいるのではないと思うが、社会資源につなぐ役を誰が担うかが課題として挙がった。

<総括>

・ソーシャルワークは、人と環境の間に介入することが求められている。本人と環境の相互接触面の問題を見る視点が必要。本人に社会資源と環境に相互接触面がないのであればそれを作る必要がある。それを作るのがソーシャルワーク。また、ストレングスの視点も振り返ってほしい。ストレングスとは色々な角度から本人を観ることである。問題があっても当たり前だと思えば苦しくない。権利擁護の視点も重要。本人の希望は何なのだろう、と想像して支援することが大切である。

・ごみ屋敷問題では、ヘルパー2人体制での支援時に加算が出来ないか等、新しい試みを考えていくことも必要。

○第 3 回定例会議（平成 29 年 12 月 15 日）…テーマ『あったらいいな！こんなコミュニティ～住民主体の理想的な活動拠点を作り出そう～』

<内容>

・各事業所が提供できる強みを活かし、地域を巻き込んで相談支援を活性化できないか、グループワークで検討。住民主体の取り組みとしてどんな活動がしたいか自由な発想で考える。

<グループワークまとめ>

・世代間、異文化交流ができる場をイメージしてみた。

・大学生、専門学生、地域住民による運営で交流できる場を考えた。

・人が集まってくるゆしみが必要（例：スーパー銭湯、区民菜園、ドッグラン、学習支援、美容サロン、英会話教室、パソコン教室、料理教室、カフェ、フードコート、地ビール工場、子どもが走り回れる場、バーベキュー場、フリーマーケットなど）。また、出張支援も行う。

<総括>

・地域生活において解決できない課題に対して、発想の転換が必要だと感じた。解決策を制度の中で考えがちなが、ないものを作り上げていく発想が大事。障害がある方もない方も全てを取り巻く地域コミュニティを考えていくこと、それはつまり共生社会の実現ということ。全国各地には、実際に町づくりから始めている地域もある。ネットワークを組んでアイデアを出し、行政と連携して考えていけるようにしたい。

- このようなネットワークができるとよい。課題、キーワードは“世代間の交流”、“子育て世代と高齢者の交流”だと感じた。
- 家族が亡くなり残された家をどうするかなど、相談事も困難なことが増えてきて、事業所だけでは支えきれず隣人や地域の方と相談しながら進めていかないと解決しない問題が多い。地域のネットワークが大事だと感じた。
- 今日のワークでの意見を一つでも二つでも形にしていき、今ある相談支援事業所に地域の人が入り、地域の人と一緒に活動できるような発想が必要。しかし、地域の方は知らないことだらけである。私たち福祉サービス事業所は、地域に向けて何をしているかをアピールすることがとても大事。
- 社会福祉協議会が社会福祉法人の事業所を集めて、「地域活動広域ネットワーク」活動をしている。一事業所で行えることは限られているが、法人の強みを活かしてネットワークを組んでやっていこうという動きがすごく活発になってきている。定例会議や部会を中心とした自立支援協議会でも形として何か残せるように、今日の皆さんの意見を協議会に持ち帰り伝えていきたい。